

夜受降城に上つて笛を聞く（李益）

回樂峯前沙似雪 受降城外月如霜

不知何處吹蘆管 一夜征人盡望鄉

回樂 峯前 沙 雪に 似たり

受降 城外 月 霜の 如し

知らず 何れの 処にか 蘆管を 吹く

一夜 征人 尽く 郷を 望む

解説 晩秋の月の夜、受降城を守る兵士は胡茄の音を聞いて皆故郷を望んだ。その望郷の風情をよんだ詩。

語釈 ※受降城Ⅱ受降城は、初め漢の武帝のとき、將軍の公孫敖が塞外に築き、唐代になつて、突闕の攻撃を防ぐため、これを再興し綏遠省の黄河沿いに築いた。※回樂峯Ⅱ山西省大同府の西五百里にあるというのが妥当であろう。※蘆管Ⅱ蘆の葉を巻いて作った笛。胡の人たちの吹く笛。胡茄ともいう。※征人Ⅱ出征兵士。

通釈 回樂峯の前に広がる砂は雪に似てまっ白であり、受降城外に輝く月の光は、霜のように冷たく輝いている。どこで吹いているのかわからないが、ものさびしい蘆笛の音が聞こえてくる。その夜、笛の音を聞いた出征兵士達はことごとく故郷を望んだ。